

一人ひとりに 合わせた 働き方を

障害の有無に関わらず、自分の能力や強みを活かして社会の一員として過ごせる社会の実現に向けて、尾道市内にはさまざまなサービスや就労を支援する事業所があります。ここでは、障害のある人も、サポートを受けながら、それぞれに合った仕事や活動を行っています。市内の事業所での生活などについて、お話を聞きました。

社会福祉法人 あづみの森



「障がい者サポートセンターあおぎり」では、現在32人の利用者が、職員の支援を受けながら、「自分らしく充実した毎日を送る」ことを目指して、働いています。

ここでは、昨年から新たに地ビール作りを始めました。

製造に携わっているのは、障害のある利用者と職員です。他の醸造所で働いた経験のある職員の指導のもと、ビン詰めやシール貼り、化粧箱づくりなど、それぞれができる業務を行っています。



▲ラベル貼り作業

職員の實政智世さんは、「障害があるからこの作業が難しい、だからやらない。というのではなく、障害があってもできるような工夫を探しています」と話します。例えばラベル貼りでは、見本を目の前に置いて、それを目標の一つ一つ丁寧に貼っていくことができるようにと、その人にあった工夫をしているそう。「私たちは利用者さんと一日の大半の時間を一緒に過ごしています。家族にはなれないけれど、安心して過ごせる人がいる、一人ぼっちではないという思いを持ってもらえたら」と、實政さんは語っていました。

市内のお土産店で購入できる地ビールは、「尾道ペールエール」「尾道ホワイトエール」「尾道ハニーレモン」の3種類。



インタビュー Interview



猪股直樹さん (45歳)

元々、香川県で介護職として働いていましたが、32歳のとき筋力が徐々に衰えていく進行性の難病を発症し、現在は歩けなくなり、車いすですべて生活しています。

病気が進行し、地元の尾道に帰ってきてからはしばらくは家で過ごしていましたが、なるべく外に出て人との関わりを持ちたいと思うようになりました。自分でできる範囲にはなりますが、できることがあればチャレンジしてみたいと思っています。

社会福祉法人 尾道さつき会



「尾道さつき作業所」では、食品作業や、委託清掃作業、洗濯作業など、希望や適性を考慮したさまざまな作業に、身体・知的などの障害がある15人の利用者が携わっています。取材に訪れた日は、カカオ豆の殻を取り除く作業中。



▲カカオ豆の殻取り

ここで製造されているチョコレートは、カカオ豆の焙煎から成型、パッケージ詰めまですべて手作業で行われています。特に、焙煎後のカカオから不要な殻をすべて取り除く作業では、機械では見逃してしまう細かな部分もきれいにできることが手作業の強みです。

利用者の柿原大乗さんは、この作業所に約20年通所している大ベテラン。細かい作業を丁寧に行うことが得意で、根気強さが求められる殻取り作業を真剣な眼差しでこなします。柿原さんと共に製造業務に携わる職員の松山さんは、「柿原さんや、集中力が求められる仕事得意な利用者さんは、とても高い精度で仕上げてくれます。あまりの細かさに私なら音を上げてしまいそうです(笑)けれどそのおかげで、雑味が少なく、ピュアな味わいの製品をお届けすることができていると感じています」と嬉しそうに語っていました。

チョコレートをはじめとする製品はオンラインストアでも購入可能。素材も可能な限り尾道産にこだわっています。



インタビュー Interview



柿原大乗さん (38歳)

高校を卒業してからさつき作業所に通所し始めて、約20年になります。午前中は清掃作業、午後は食品製造など、色々な種類の作業に携わっていて、気の合う仲間もいるので、毎日楽しく過ごしています。

カカオの殻を剥くときには、食べた人みんなに幸せになってほしいと思いを込めながら、作業に打ち込んでいます。

スポーツを通じて世界に挑む



森日奈野さん



「スペシャルオリンピックス」とは、知的障害のある人たちに、日常的なスポーツトレーニングとその成果の発表の場である競技会を提供する国際的なスポーツ組織です。世界190カ国以上で550万人、国内では47都道府県で約8,600人がアスリートとして活動に参加しています。 ※2019年末時点。 ©Special Olympics Nippon

尾道でも、世界大会を目指して日々練習に励んでいる人たちがいます。ダウン症の森日奈野さんは、社会福祉法人「若菜」の運営するカレー店で接客業などに取り組みながら、バスケットボール、陸上など7種目の練習をしています。2019年にはアラブ首長国連邦のアブダビで開催された夏季世界大会にも出場した実力者です。「勝てなくても、みんなと一緒にやることが楽しい」と話す森さん。東京2020オリンピックの聖火ランナーとしても選ばれており、本番に向け、練習用のトーチでトレーニングに励んでいます。



活動を支援する尾道支部事務局の宮本恵理さんは、ご自身も知的障害の息子さんを育てた親でもあります。「現在、尾道支部では、7歳～59歳までの約60人が練習に励んでいます。障害のある子は、一つのことができるようになるのに時間はかかるけれど、積み重ねれば少しずつでも成長していくことがわかります。スポーツでできることを増やし、自分に対する自信を養うことができますし、また、体力を付けることができるので就労にも結び付きやすいです。」と、話す宮本さん。息子さんはスペシャルオリンピックスの大会に向けたトレーニングのおかげもあってか、現在は民間企業で働いているそう。「うちの子にはハードルが高い、と感じる人も、慣れるには時間が掛かるかもしれませんが、一度チャレンジしてほしい」と語りました。



宮本恵理さん

Topics

手話は「言語」



尾道のろうあ協会会長 和泉正人さん

聴覚に障害のある私たちが日常使っている手話という「言語」は、手・指の動きだけでなく口の動きや顔の表情なども含んでいます。

コロナ禍のなか、多くの方がマスクを着けての生活になり、口元を読み取ることができずコミュニケーションに支障をきたす場面もあります。

健聴者と私たちをつなぐためには、手話通訳者によるコミュニケーション支援がかかせません。手話通訳者の活動に、ご理解とご協力をお願いします。